

ヨーロッパの旅 (二)

平井信義

ハイデルベルク城のテラスで偶然に出会った学生といっしょに、私どももケールブルカーにのりこみ、山を下った。その学生に会ったことが、何か私どものところを引き立ててくれている。旅にはものうい一面や悲しい一面があるものだ。しかし、この日以後、悲しかったりもの憂かったりする時があると、きまつてこの二人の学生のことを思い出した。そして、二人を励ます気持が、同時に自分の心を励ますことになるのであった。

二人の学生にも、私どもに会ったことが心をひき立てる一助になったようだ。カフェー「赤い牡牛」へ先導する私のあとから、家内と肩を並べて歩きながら、イタリヤからスイスを抜け、ドイツに入り、そしてこの町に通りつくまでの話をさかんにしている。ヒッチハイクだから、なかなか自動車がかまらずに、苦勞

することもしばしばあるらしい。自動車がとまらないので、二時間も道路脇で立往生しなければならなかったこともあるという。しかし、サンフロンの峠を越すときは、スイスの大会社の重役の大きな車のソファで、ふんぞり返っていたという。「気持ちよかったですよ！」と、二人は目を見合わせて微笑する。私も、「さぞ気持ちよかったですよ」と思う。宿は、ヨーロッパ各地にあるユースホテルを求めたのだそうだ。ここに泊る限り、一日一ドル以内ですむ。その代り、朝、ちゃんと雑巾掛けをしたり掃除をしたりするのですよ」という。その目には、そうするのが当然だというように輝きがあった。実に若々しい輝きである。

そんな話をしながら、カフェー「赤い牡牛」に入った。うす暗い部屋が広く続いている。いくつかの食卓がうすきたなく置かれ

ている。壁には、ところ狭しと、写真だのサインのしてある紙だの、剣だの——さまざまなものが掛けてあって、目をどこにとめておけばよいか、わからないほどである。

「この辺にしましょうか？」

と、私の先導で入口から右手の食卓に腰をおろした。この学生には、家内と私の間に坐ってもらい、私どもは向かい合うように坐った。多少とも日本的な家庭的な雰囲気を作るように、小さな心づかいをしたつもりであった。

「何を食べましょうか？」私は二人にきいた。

「何でも結構です。何しろ、食事としてまとまったものは、このところ食っていないし、ドイツ語は全くわからないのですから……」

「旅行中、ことばはどうしているのですか？」

「ぼくらは英語しかしゃべれないので、実は困ることもありますが、何とかやっています」と二人は言う。

たしかに、何とかやってきたのだろう。既にイタリーからスイス、西ドイツと、渡り歩いてきたのだから……。そしてことばでは本当に困ることもあるだろうと察せられたが、そうした困難を愚痴っぽく言う気配は一つもなかった。雄々しいというべきではないだろうか。

私はメニューを見ながら、量が多くてしかもうまそうなのを

選んだ。

「どうでしょう、牛のカツレツは？」

「すてきななあ！」と一人が大声をあげた。「それで結構です」

と、二人は食べるものなら何でもよいという表情で答えた。

「何しろ、立ち食いばかりしてきたものですから……」と一人が、頭をかいた。

私も、この前のヨーロッパ旅行のとき、しばしば金欠病にかかったのを思い出した。特に日本に帰る途中、イタリーあたりからその病気が著しくなり、アテネに滞在中は、四、五回も、町の辻で売っている一本一〇円也の焼とうもろこしで空腹をしのいだものである。それは、醤油はもちろんのこと塩もついていなかったし、とうもろこし自体の味もよくなかったから、ただ、空腹をまぎらわす程度であった——といってもよい。それと同じようなことを、この二人の学生がやっているのだと考えると、懐旧の情はひとしお深かった。

われわれの前にある厚板の食卓は、隅から隅までいたずら描きでいっぱいであった。いたずら描きというよりも、小刀か何かでそのいたずら描きがかなり深く刻み込まれていた。過去百年以来、ハイデルベルクで学ぶ学生がここに飲み食いしてきた、いろいろといったずら描きを楽しんだものが、このように溜つたものである。その中にぼつぼつと漢字もまじっている。わが国でも高校

生るときから、このハイデルベルクに懾れをもった者が、多数に
あつたはずである。そして遂に遊学の目的を達した人たちが、こ
の食卓に、記念の刻みを入れたかも知れない。

「しかし、昔の学生と今の学生がちがう以上に、時代も大きく変
化してしまいましたね」と、一人言を言うように、私はいった。

世界が、いまほど大きく変転している時はないのではなからう
か——という気持がしみじみとしてくるような部屋の雰囲気であ
る。ドッと笑い声が起こり、男女の学生であろう、部屋の隅に六、
七人いて、何か一と言二と言言っては笑い声を立てている。しか
し、それも、十九世紀の学生とは非常にちがった笑いの内容をも
っているのではなからうか——私は、漠然とした思いにぼんやり
と時を追っていた。

しばらく待った。ようやく太ったおばさんがビールのジョッキ
を持ってきた。そして、めいめいの前にそれをおいた。早速、
「では、フロースト！」

ジョッキを高く捧げて、まず、健康を祝った。そして、これか
らの旅が、楽しく練りひろげられますように——という祈りを、
ここにこめて、もう一度、

「フロースト？」
といった。

ひと口のビールがのどを通ると、

「うめーなあ」

「うまいなあ」

二人の学生は、顔を見合わせ、歓喜の目差しを私の方にむけ
た。

「ほくも、今日は特においしい」

私もまた一と口、ぐっと飲んだ。アルコールに弱い家内まで
が、ジョッキをあげて、一人の学生の目をじっと見詰め、ジョッ
キに口をつけてはまた、もう一人の学生の目をじっと見るのであ
つた。それを私もまた祝福する。その間、私のところをきりっと
引き緊めてくれる雰囲気があつた。

やがて、二人の学生の前に、どかっ——といつてもいいくら
い大きなカツレツが白皿にのせられた。野菜の酢づけも、ガラス
の皿にのせられて、肉の皿の横におかれた。

「うわっ、すげえなあ！」

と歓声が一人の学生の口から迸り出る。そして、あまり器用とは
いえぬ手つきで、カツレツにフォークとナイフをあてがう二
人。私どもは、そうした二人の動作に見入りながら、うれしくて
たまらなかつた。それは二人にほれ込んだ——といった気持から
であつた。

肉を口に入れた一人が、また、

「うめえなあ！」

と歓声をあげた。それは、全くここからこみあげてくる歓声であつた。素朴な学生の叫びである——といった方がよい。

「どうぞ、たくさんあがつて下さい。足りなければ追加しますから」

「うめえなあ。ほんとに、うまい」

こんな会話が二、三度繰り返されているうちに、カツレットはどんどん小さくなっていった。

「うちの子どもたちにも、このような旅行をさせたいものだ」

——私のところには、日本に残してきた三人の子どものことが、頭をかすめた。この二人の学生のように、いろいろな辛さに耐えて、雄々しく世界を歩きまわることのできるような人格を持つて欲しい、——こんな考えが、涌いたのであつた。

二人の学生は、今日ハイデルベルクを出発して、マインツにいき、北上して西ドイツからオランダに出て、イギリスまでヒッチハイクを続けるという。まだまだ、苦勞の多い旅が続くことであるが、どうかそれに耐えて欲しい。私どもは、それを願つた。

食事が終ると、私どもの腹はいっぱいになった。学生たちも、大きなカツレットに、腹がいっぱいになったようであつた。ビールもジョッキ一つで、もう真つ赤な顔になっていた。

「ほんとに、おいしかったなあ！」

「おいしかった」

二人は、顔を見合わせていった。その顔付きをみて、私どもも満足した。

「ここへ来た記念に、このジョッキを持って帰らなさいな」と私は言つた。この「赤い牡牛」では、記念にジョッキを譲ってくれるのである。

「いいですか、持っていても？」

と二人は、うれしい気持を顔いっぱいに見わした。

「いいですとも、生涯の思い出になるでしょうね」と、私は答へた。

「時に先生、先生の学校と、お名前をきかせて下さいませんか？」と、学生の一人がメモ帳を出しながら、私に向かつていった。

「どうでしょう、それを言うことは、やめにしようではありませんか。ぼくたちは、あなたの方お二人の意気に感じ入つて、こうして食事をいっしょにしていたいたまでです。名前を申し上げて、それで、あなた方がぼくたちに恩義などを感ずるようなことがあれば、ぼくたちの気持とはちがつてしまふわけです。だから、どうぞでしょう。名前などをお互いにあかすことなく、ここだけの感激をお互いに心に秘めてお別れしようではありませんか」

私の提案に、学生も納得したようであつた。そして、それ以

上、私どもの名前をきくことをしなかった。

間もなく、四人は「赤い牡牛」を出た。そして、市電の線路に沿って、汽車の駅の方に歩き出した。

「荷物が駅のボックスに預けてあるので、それをとってから、ピッチハイクをしなければならぬのです」

「では、ごいっしょにいきましょう。私どもも駅に荷物を預けてあるのですから。しかし、その前にもう一度、ネッカー河をみていきましょう。アルトハイデルベルクのネッカー河に名残をこめて……」

「ぼくたちもお伴します。ごいっしょさせて下さい」

四人は、いく度か市電が来るのをよけながら、狭いメインストリートを歩きながら、ハイデルベルクの中心街に出て、そこを右にまがって、ネッカー河に出た。橋のたもとから見ると、ネッカー河は七年前と変わらぬように流れていた。その流れは、七年前と全く変わらないように思えた。流れ流れて、大西洋に流入する水なのである。私ども四人は、それぞれの思いをこめて、ネッカー河をあとして、市電に乗り込み、鉄道の駅にいった。

駅に預けてある荷物のボックスは、学生たちの場所と、私たちの場所とが離れていた。そこで、電車をおりるときさようなら手握をしたのであったが、荷物をとり出すと、再びいっしょになつてしまった。学生二人と、私たち二人の間には、何去り難かい気

持があつたにちがいない。少なくとも、私たちのこのころの中には、そうした気持があつた。学生たちは、リュックサックを漲らせていた。何が入っているのか、はち切れそうであつた。そのリュックサックの背には、日の丸の旗がはりつけてあつた。

「こうして、日の丸をつけて歩いていると、たいへん助かります」と、学生はいう。「非常に親切にしてくれる人もあります」

日の丸のよし悪しはともかくとして、こうした学生が日の丸をつけてヨーロッパを歩き廻ることは、わが国の存在のみでなく、本国のよきを二人の学生に代表させることができる。おそらく、二人に会つたヨーロッパ人も、二人の素朴でまじめで、しかもフアイトのある意気に打たれるのではなからうか。国威というものを言うのであれば、こうした二人の力がいかに大きいものであるうか——と考えるのであつた。

「ピッチハイクをしていますが、ぼくたちはただのりはしていません。こけしとか、日本独特のちよつとしたものがあるでしょう。それを、お礼の代りにあげるのです。とても喜びますよ」

——これも、二人の人格からにじみ出ていることなのだろう。どんなものにしても、それを与える人の人格によつてうれしくもなり厭おしくもなるものである。二人を自動車にのせ、そして二人からちよつとしたお礼を喜ぶヨーロッパ人たちも、結局は二人の学生の意気に感じたからにちがいないと思うのである。

いよいよ、わたくしどもは二人に別れる時間がきた。何回も、さよならさよならと言いたい気持であったが、私どもはいさぎよく二人に別れた。そしてフラットホームへと降りたつたのである。ミュンヘンへの旅が待っていた。

「それにしても、えらい学生だねえ」

私ども二人の口からはからずも衝いてでたことばであった。「何かとして、こうして学生を海外に出したいものだね」と、私は家内に入った。そのために、国家ももつと真剣になって欲しい。この二人と比較するのもおろかしいことであるが、日本からヨーロッパに来るおとなたちが、いったい何を帰るのだろうか。殊に、代議士といわれる諸氏が、ヨーロッパに来ての行状は、どこにいても評判の悪いものであった。折角ヨーロッパに来たのに、どこへもせずホテルにとじこもって、選挙民に「うるわしのヨーロッパに来ました」という絵葉書を書いている代議士もあるというようなことを、方々でかされた。「ホテルの外に出ても特に政治の研究するではなし、むしろ、キャバレーとか女を要求する者もあるのですから、全くかまいませんわ」と、怒りをこめて私に話してくれた人もいる。また、たくさんに土産物を買う、という話もある。その点、事実かどうか私はよく知らない。しかし、最も私のところをとらえたのは、代議士諸氏が、国費をつかっているということである。一日に三〇〇五〇ドル（一万円から

一万五千元）を使っているということであった。このような国費（税金）の浪費は、私たちにとっては、耐えられない。これだけのお金があれば、三々四〇人の学生をヨーロッパに送ることができると思うと、いつそう耐えられない。学生諸君は、足をヨーロッパの大地にふみしめ、大きな口をあげてヨーロッパの空気を吸い、二つの目でじつとヨーロッパを見詰めるだろう。しっかりと体験を通して、ヨーロッパのよき、悪きを見抜くことができるだろう。そうなれば、いたずらに、ヨーロッパを讚美したり、ヨーロッパをけなしたりするようなことはしないだろう。

それ以上に、青年の勇猛心を養い、世界に雄飛する気持を導く絶好の機会とすることができると思う。——私は二人の学生が、既に広大なアウトバーン（自動車専用道路）にでて、行き交う自動車にむけてヒッチハイクを求める合図をしている姿を思い浮かべながら、ミュンヘンにいく汽車がくるのを待っていた。

